

御先祖記 二

御先祖記二

自元龜三至

天正十二甲申

一元龜三壬申十二月廿二日、甲州武田信玄遠州味方原へ打出る、家康公八味方原大野に御備を出さる、織田信長より加勢、平手監物・水野下野守・林佐渡守・佐久間九右衛門・大垣卜全・毛利河内守・瀧川伊予守・稲葉伊予守・安藤伊賀守、九頭荒木本坂に陳(陣)す、信玄味方の大軍を聞、合戦有間鋪との遠慮八、家康公八海道一番の弓取と八いへとも我朝に若年の武士八家康一人に留めたるに、其上信長の加勢を被越事なれ八、縦(たとい)一戦に利を得たりといふとも大河大坂を越て引取事あやうかるへし、とておさ(刑部)かへに通らんとす、此時浜松勢合戦をはしめんとす、鳥居四郎左衛門物見よ

り歸、今日の軍不可然、其故八敵段々に備をまふけ堅陳^(陣)
を張申候、味方八此際に只一重にてあやうし、先手早々
御引取候へと申、家康公御腹立被成、今日の合戦をとゝむる
事汝日比^(つひ)にちかひ臆^(違)したるやと被仰候、四郎左衛門申上る、私
の剛億^(臆)の儀八さし置申候、勝負の善悪を御考、軍を被成
可然候、若是^(もし)非合戦と思召候八、敵堀田郷へ押行時分をか^(考へ)かへ
御合戦被成可然よし申上る時に、成瀬藤蔵申ける八、御合戦を
はしめられ戦^(いくさ)負候八、討死仕候半こそ侍の本意に候、とて
合戦をすゝむ 如詞合戦
初討死也 渡部半蔵も物見より帰と御合戦を
止る処に、大久保七郎右衛門・柴田七九郎合戦をはしめんとす、武田
信玄八山際まで引とらんとする所に小山田兵衛尉か内上原
能登ぎよいか谷より合戦の勝負を見積り申処、其利

有故先陳を小山田に被申付、申の刻より合戦をはしむ
此合戦退口ノ時、大久保勘七郎惣軍トトモニ被追立、一言坂ニ踏
止リ鉄炮ヲ以テニ、三間ニテ敵ヲ討、然レトモ不当、後公ノ御前ニ
テ都築藤市カ弓ニテ止リ候故其ヲ力ニ留リ候ト互ニ卑下
イタシ、勘七申八、我等力臆病故ト申上ケレハ、公仰ニ云、汝臆病ニ
非ス、如常カマヘ討ケルカト仰ケレハ、中々ト申上、其時仰ニ、左様ノ
時ハ何時モ火皿ノ下ヲ諸手ニテ持討者也、追立ラレ情氣ノア
ラクシテ必狂フ者也ト被仰

小山田、石川伯耆守と相戦に、石川か兵外山小作一番に鎧を
仕、家康公御旗本を以て山縣三郎兵衛か三百余騎を三町
追立らるゝ、酒井左衛門忠次・榊原小平太康政・大久保七郎右衛門
忠世、横に懸て山家三方

作手・段峯
長篠ヲ云

切崩す、甲兵、勝頼・山縣

か先手より横掛る、武田左馬助、穴山梅雪、勝頼に繞て
浜松勢を追崩す、信玄下知を以て小荷駄奉行甘利か
勢を横に入らるゝ、依之信長の加勢平手監物討死也
信長、軍利の備といへとも浜松勢の剛強成(なる)を氣遣脇備
を先へ繰、捨篝を焼て用心す、榊原小平太八味方敗軍
なれとも不退、遙後に城東郡の方西嶋へ引退、此合戦
に味方本多肥後守忠貞・鳥居四郎左衛門忠廣・岩城勘解由
父子・松平弥右衛門・加藤次郎九郎景光・天野麦右衛門政景・青木
又四郎・渡部十右衛門・同新九郎・中根平右衛門・成瀬藤蔵を始三
百余人討死す、家康公八万兵を集て猶敵にむか八んと被
成処へ夏目次郎右衛門参り、大将八命を全して運を開なり
とて御馬の口を取て味方の陳へ引向、鎧の石突にて御馬

をたゞけ八、御馬八逸物にて懸走る(儘)尽次郎右衛門八踏留て討死仕、此間に家康公、大久保七郎右衛門に被仰付、犀欠の辺に御旗を被立、味方の敗軍を集らるゝ、其より浜松の城へ御引取候処に敵急に追懸奉る、真籠(馬籠)にて鳥居彦右衛門元忠取て返し身命をおします戦ふに、信玄の旗本よりはなつ矢彦右衛門か鞍の前輪より跨所を射られて手負て引退、渡部半蔵八玄黙口をかためて防き戦ふ、渡部半蔵・勝厘(合)甚五兵衛・桜井庄之助粉骨を尽す、渡部半蔵二人を突伏、半十郎・庄之助・甚五兵衛に首をとらする、石川伯耆守廣昌殿りして味方を引挙る、夜に入、石川と大久保七郎右衛門と天野三郎兵衛康景三人の下知を以て鉄炮をつよく打しめて敵を払、又天野三郎兵衛と大久保七郎右衛門と兩人、味方の劣兵の中より鉄炮十六挺ゑらひ

召連て出、信玄の野陳犀欠の辺へ打懸る、甲兵周章ふためき
明れ八廿三日の朝、浜松より味方原へ足輕にて被出、鉄炮を打懸
させらるゝ、其日、甲兵の押へ八穴山梅雪なる故、有住大学・穂坂常
陸馬を蒐来るといへとも鉄炮に被打立引退く、爰にも敵の
首五ツを得たり

一 元龜四癸酉天正元年に改元也、正月十一日、武田信玄遠州おさかへ^(刑部)
にて越年有て三州野田の城へ取詰責らる、城主菅沼新八郎
浜松よりの加勢松平与市忠正合てわつか四百余人なれともよく
防戦、信玄金堀を入れて城中の水を切流す、そののミならず
城中糧つきて持こらゆる事ならさるゆへ、信玄へ新八郎使を
以て申八、我等一人切腹申城を明渡候半間、城兵をたすけられ
候へと断申候、信玄相違不可有との返事也、其故新八郎城を出

る処を甲兵待請生捕、新八八剛の武士なれ八、新八か心を変して信玄に与力申なら八可召仕との事に候、命を助て山縣三郎兵衛に預置るゝ所に、新八、元来家康公へ忠心ふかきゆへ家康公に奥平道紋か人質在之候、我等と御取替候様に信玄へ申故、其段家康公へ被仰遣、二月十五日に互に二千余騎を以是を送に、長篠の馬場河中にて人質と新八郎取替る也、作手城主奥平道紋

長篠城主菅沼伊豆守、段峯城主菅沼形部力人質ト新八郎ヲ代也

一 同年二月十六日、武田信玄病気に付甲州へ引返、三月、三州へ出馬し野田のむかひ照山といふ山に旗立陳城をかまへらるへきと有之時、高坂弾正か夢に

家光山の松か枝千代千代春春春

と見る、切吉田を可攻と有時信玄病つかれ甲州へ歸らるゝに、根

羽といふ処より煩重り四月十三日駒場にて病死なり、信玄逝

去の後、織田信長、岩村の城主

三河記云、東美濃岩村城ヲ八信長ノ伯母持給フカ、信長ノ御子御坊様ヲ養子ニ被成

ケルカ、信長へ別心有テ勝頼ト一味シ秋山ヲ引入、秋山と夫婦ニ被成御坊様ヲ甲斐国へカリ給、其カヘリニ勝頼八足助口へ御働有ト言、家康公、足助へ御出陳有リ、然トモ勝頼其ヨリ引入玉フ、信長八御立腹ニテ岩村へ押寄城ヲ責落、秋山ヲ八生捕ニシテ磔ニ懸、軍兵トモヲ八二ノ丸ニ追入テ鹿垣ヲ結、火ヲ八付焼殺シ玉フ、伯母ヲ八小牧ニテ手討ニナサルト有 信玄の家来秋山伯耆守を責らるゝに、城中糧尽て金

銀乏けれハ、資財重宝を出し売て其金にて糧米を買、水野下野守此道具を買取たるを、証人有て下野守こそ秋山に一味して道具を得て城中へ兵糧を入るゝと信長に告る、信長より家康へ此段被仰遣候に付、久松佐渡守を下野方へ被遣、岡崎へ被指向平岩七之助を以て切腹被仰付、此時刈屋の城をは下野守弟水野惣兵衛に御とらせ被下候へとの遺言にて切腹なり、其故無相違刈屋を惣兵衛に被下候、久松佐渡守八下野守の妹婿也、故に此事に付而家

康公と義絶なり、佐渡守奥八家康公の御母なれ八継父の様成もの也

一 同年五月五日、家康公岡崎にて端午の御祝儀をあそはし六日に岡崎を御立、九日に駿河岡部迄焼働被成、十日に懸川へ御帰已来迄、信玄と御無事被遊間敷との御誓言をあそはし候十三日に吉田へ被成御座、長篠の様子を所の百姓に具に御尋、十四日に長篠の城御順見の時、坂部又蔵頭に鉄炮手を負、玉甲を抜さるに死る故、氣付を与へたれば生かへり岡崎へ歸る、五日めに物に狂ひて死す、是に付而家康公、武士の御批判に大小共の明鏡被成御金言とも有、其後四千にて長篠へ御取詰被為責、甲州武田勝頼より長篠の後詰として武田典厩を大将として馬場美濃守・小山田兵衛尉を三州へ被指向、又逍遙軒を大将として山縣三郎兵衛・

穴山・一条を遠州へ働かざるゝ、武田典厩、長篠の向城より二里程隔たる遠の小山或はイヌノ小山ト有に陳を取て明日後詰と有時、長篠城代信州先方諸我(室賀)入道、黑白駿の馬を家康公へ指上城を明渡す、典厩力なく城兵共を連て甲州へ歸る、長篠の城をは松平外記に御預なされ奥平九八郎家昌長篠にこもりたる八此以後也、扨遠州へ働たる八甲州勢一条・穴山は山縣を先手としてならしのことく備を押、逍遙軒八山縣に劣ましとて森といふ所まで働るゝ

森ヨリ穴山梅雪出テ戦フ、參河勢勝時、大久保治右衛門首ヲ取カヘルヲ榊原小平太同心七八人ニテ無理ニ奪取逃ル、治右衛門力不及追フモ勞シテ不成、歸テ後公へ榊原力同心トモ盜首ヲ御目ニ掛ル、治右衛門申八、アノ首八我等取候也皆能見申候、ソレヲ小身ニテモ御家ノ犬ニテ忠節尽候、アレ体ノ者モ過分ノ知行ヲ被下候力、能レハ罷アリ悪ケレハヲラヌ者ニテ候、アノコトクシテ八重テモ小身ナル我等はイツモ御奉公難成候也、高名ヲ不被立候事迷惑ニ存ト申ケレハ、小平太申八治右不謂事被申ソ、我等力同心トモ取申ニ無疑ト云ヘハ、治衛右門申八誰人ノヨシアシキモ貴所ノ何トテ御存知アルヘシ、其辺ヘモ不寄シテイラサル見又京物語ニ候、如何ニ同心ノ乞食ヲ引度トモナキ事八成マシト申ケレハ、君其時治右衛門イラサル事ナ申ソ、我等力家ニテ其方力武辺ニ点打者八有マシ、我等次

本多平八郎忠

勝

・ 第二シテ置ト御意ノ上八畏御前ヲ罷立、件ノ牢人ハ
ヲル事ナラスシテ逐電ス

同作左衛門重政・榊原小平太康政馳向て逍遥軒か陳を破る、穴
山・一条・山縣は逍遥軒か敗軍を聞て森へ懸付浜松勢を討
利を得たる処へ、家康公御旗を蒐(あつめ)させらるゝゆへ甲州勢
打負敗北するなり

三河記云、此時城中ニ孕石主水ト云者駿河牢人、甲州ニ属シテ籠リ落去ニ及テ
三河衆生捕、家康公へ御目掛ケレハ、其孕石ト云者ハ吾駿河ニ在シ時、上原へ鷹遣
ヒニ出シ時孕石林へ鷹翦(き)レテ入時居事ニ入候へハ、三河ノ世悴ニアキハテタリト度々申
ツル、我能覚タリ、孕石モ覚ツラン、迎我ニアキ果タル者ナレハ早々切腹サセヨトノ御
意也、主水申ハ、尤如御意非可悔、トテ南へ向テ腹ヲ切ル時、側ヨリ申ハ孕石程ノ者力
サイゴヲ不知、西ニ向テ腹ヲキレト云ケレハ、主水力云ヤウ、汝物ヲ不知、仏八十方仏土中
唯一乘法無三除仏方使ト説給フ、トテ南ニ向ヒ切腹ス、大河内ト申者ハ能御奉
公申今度命御助本国へ御力へシ被成ケリ

一 天正二年、家康公正五位下に叙し給ふ、同年平岩七之助を遠州天方
の城へ被遣、久野弾正を責らるゝ、弾正不叶して城を明のく、又可久
輪の城をは石川日向守家成・久野三郎左衛門宗能破る、三州寶來

寺六笠一宮の城をは酒井左衛門尉落す、是皆武田持の城なり

一 同四月六日、家康公御馬を被出、遠州乾の城天野宮内左衛門^(右)武田勝頼^{味方ナリ}を責

られんと瑞雲寺に御陳を被成処に、日数重りたる故兵糧尽る

それゆへ御陳を御引払被成に、大久保七郎右衛門・水野宗兵衛殿^(しんがり)を被仰

付、御倉と云所に至せ給ふ時、宮内左衛門、三木多郷より御跡をしたい

大窪へ出て味方を討、堀小太郎・鵜殿藤五郎・大久保勘七・小原金内其

外廿余人被討也、水野宗兵衛・榊原小兵太馳返し敵を打払也

宮内左衛門、田野ノ大窪村ニ出、郷人ヲ語ヒ愛宕山ノ陰彼方ノ木影ニ立隠レ跡先ニ
ナリ五人、十人宛家康御跡備ヲ射立又、勢中防ントスルニ、上ハ雲ヲ聳シ山上下
峨々タル岩谷ナレハ前後迷惑スル程ニ跡力先力中カハ不知崩レ立テ破軍ス、大久保
七郎右衛門力同心杉浦久藏力手負タルヲ、七郎右衛門馬ヨリ下リ是ニ乗レトイヘハ、久藏
腹立ウツケタル馬ノ下リヤウカナ我等体八五人、十人ウタレテモ不苦、大将モスル人ハ
如何ナリ弓矢ハ幡乗申間敷ト云ヘハ、乗度ハノレ、イヤナラハヲケ、馬ハ捨ヲクトテ七
郎右衛門ハ退ク、児玉甚内立歸リ七郎右衛門ハ退玉フムリニ久藏ヲノセ甚内ハ又七郎右衛
門ニ追付也、家康公御倉ニテノ鉄炮ノ音ヲ聞玉イテカヘラセ玉ヘハ、敵早引入天方迄退せ玉フ也

一 同五月、武田勝頼遠州へ出馬し、高天神の城小笠原与八郎長忠を

攻る、此小笠原与八郎八永禄十一年より家康公に与し、姉川の合戦にも初陣(陣)よくして名を揚、元龜二年三月、信玄遠州へ働の折節も二千余の人数にて武田の二万の大軍に向ひ少もおくれたる色なく、すくやかなるもやう成しも、能ものを数多持たる故也、其中にも渡部金太夫と云者八姉川の合戦に朱傘の金の短冊の指物にて一番鎧を仕、日本第一の本鎧と信玄より直判の感状に貞宗の脇指を添て給りし者也、其外林平吉・伊達与兵衛・吉原又兵衛・小池左近など、云者、高天神の追手池の壇へ備を出し、利発に走りめぐりて見事なり、然とも武田方岡部か責口より猿もりと云(廓カ)榔(廓カ)を七月二日に乗とられ、小笠原叶はて(あつか)嘸ひ(あつか)を入れて勝頼より小笠原に富士の下かた鶺鴒と云所にて壹万貫の所領を被遣約束にて城を明渡す、信長公八高天神の後詰して吉田迄御出、家康

公八荒井迄御出被成候へ共、小笠原の城を明渡す故無是非御馬を被入る、信長公、与八郎を大に御そしり立腹也、小笠原八武田に随ひ甲州落去の後小田原へ退たるを、北条氏直へ信長公達て御申上小田原にて与八郎に切腹をさせ、首を信長公へ被遣けり、渡部金兵衛は天正十年甲州落去の時、仁科五郎晴清と一所に高任にて討死するなり

一 同九月武田勝頼遠州へ働出、大天龍の川端に備をたて、家康公は小天龍の向ひに御陳を立らる

村上弥右衛門 内藤四郎左衛門 植村庄右衛門 渡部半藏

大久保七郎右衛門 森河金右衛門 加藤喜助 成瀬吉右衛門

鳥居彦右衛門 大久保治右衛門 日下部兵右衛門 山本帯刀

内藤平左衛門 青山藤蔵 安部善八 高木九助

榊原集人

柴田七九郎

小栗仁右衛門

梶金平

重野七兵衛

天野傳六

都築惣左衛門

松下加兵衛

酒井与九郎

服部半蔵

彼是三十人計大物見に被出、勝頼方を鉄炮にて打取らんとす、切下の瀬を武田方より五騎逃出て渡す、味方三十余騎の衆掛向ふを見て河中より引かへず、又武田方より三騎河へ乗込と勝頼惣人数一度に川を越、家康公八小天龍より張付場迄又物見を被遣候処に、柴田七九郎一人拔出、山縣か備すゝむて二町程来てとくとさけすむ、勝頼方より廣瀬郷左衛門あますまし、とて五間程進、柴田八足早に逃延る多中より拔出、敵近く一人通り候を不討、子細八、海道一の弓取とて武田方にても誉る故結句追たる郷左衛門を

そしる也、匂坂六郎五郎・松平因幡八三百にて大天龍の中瀬を前にあてゝ備たるに、小笠原与八郎、武田へ新参故一手柄と思ひてよき働精を出し、松平因幡を生捕、勝頼則天龍の端にて首をきらせらるゝなり

或書ニ柴田軍鑑ヲ近ク仕懸候ユへ廣瀬手近ク追詰候ユへ、柴田馬ヲ留テ廣瀬ニ言葉ヲカケレハ、敵味方ノ間眼前也、願ハクハ互ニ馬ヨリヨリ立心ヨク勝負ヲセント云、其時廣瀬悦ヒ則馬ヨリヨリ立時、柴田八鎧ニ鞭ヲアワセ重テ見参仕ラントテニケ延ト云云

一 天正三年五月朔日、甲州武田四郎勝頼、壹万五千の人数を卒し

奥平九八郎信昌か後号美作守、父八
監物貞能ト有楯籠る長篠の城を責る

鳴巢に武田兵庫頭を大将として三枝松勘解由左衛門・飯尾弥四右衛門・五味与惣兵衛・名和無理之助に千の人数を指そへて守せ長篠の城を二重三重に取巻柵を付、竹手把を以てしより金堀を入れて夜昼を八(別かす)かす攻さする、十三日の夜八鹿角を以瓢

丸の屏を引破り、十四日の夜八勢楼を揚んとす、九八郎鉄炮をつよくうたせてせいろうを上させず、敵手たてをかへて責れ八、九八郎方便をかへて防戦ゆへ毎度武田か兵討れ引退、かくて九八郎城中の兵糧を黙検してミるに此月を過しかたし、因茲家康公へ後詰を乞奉んと思へとも武田か勢いく重ともなく取巻けれ八鳥ならては通ふへきやうなし、如何せんと申ける時、鳥居強右衛門、某城兵の命に代て救て見申候半、とて今夜此国をなんなく出て向ふの山に煙を立て申、もし煙をあけす候八、うたれたると思召母と一人の子を頼申とて

我君の命にかはる玉の緒八何いとひけん(ものふ)武士の道

と云ひ、十四日の夜城を出る、十五日の明ほのに約束の煙を立て

岡崎へ馳付、家康公八長篠の後詰の事を兼てより信長公へ
小栗大六を以て被仰入しかは、十五日に信長岡崎へ下着し給ふ
則九八郎口上をす、祢^(強)右衛門申上る、信長聞召御返事をは飛脚を
以て可被仰、とて強右衛門をは留させ給へとも、罷歸城中の者共に
申聞せ力を付申さん、とて十六日の夜長篠の地へ歸付、城へ何とし
てか可入と見はからひ立廻りけるを、勝頼の家人川原弥太郎
河原弥太郎八道遥軒力同心力家
来可成、三河記二道遥軒責口卜有 見あやしめていましめ勝頼公の前に引
す^(据える)ゆる、勝頼則名字様子を尋らるゝに強右衛門少しもわるひれす
有の俣に申へしとの事成ゆへ強右衛門是に同意せり、然は頼度
事有、城中のしたしきものを呼て信長此表後詰中々思ひも
よらす候間、城を渡し立退候へと信長・家康返事のよし申くれ候
へと頼るゝ、強右衛門意^(心得)得申候とて目付を乞て伴ひ柵際へ寄て城中へ

申けるは、強右衛門こそ只今罷歸候へ、信長・家康後詰の事一、三日の内成へし、能々城を持給へといへ八、目付の者頓而捕ていましめ勝頼の前にて首をきる、信長父子三人、五万余騎を引率卒し門出に武田調伏の連歌を被成

松の枝に竹たくひなきあした哉

四郎八見へぬ卯の花かきね

入月も山かたうすく成はてゝ

織田八さかりと見ゆる成けり

五月廿日、長篠の近所あるみ原に陳^(陣)を取、勝頼の軍兵八皆馬上達者にていつれの敵に向ひてもひらに馬を乗込懸崩よし聞けれ八、とて切所を三所にかまへ、柵を三重に付て先陣の備をまふけらるゝ、此陳^(陣)に如何したりけん、信長の諸勢い^(勇)さま^(ま)さり

けれ八、信長衆の前にて家康公、酒井左衛門にいくみの狂言を被仰付、左衛門八きこふる名人なるに、諸人を諫んための狂言なれば甲を抜て高紐にかけ、誠におかしく面白おとけすまし鼻をかみて入時、諸人一度にとつと笑けれ八、此勢ひにて合戦の評定有、武田四郎勝頼八、信長・家康大軍にて長篠の後詰を聞、家臣を集て異見を聞に、馬場美濃守の云、大敵に逢て八隠遊と申事候へは今度八先甲州へ御馬を被入、上方勢引退候八、又突て「又馬を入幾度もか様に被成、若敵跡をしたひ候八、信濃の内まで遠々と引入一合戦被成候へ、勝利疑有へからず、と申けれ八、長閑進三出て申、新羅三郎義光公より武田はしまつて以来敵を見て引入給ふためしなし、勝頼公御代に剣をけかし給八ん事如何思召候といへは、勝頼、長閑か言葉は尤との給ふ、又美濃守申八、さら八

長篠城を俄責に被成候へ、長篠に八鉄炮五百挺ならて八候まし
鉄炮に死人五百人、二番目の鉄炮八あはて、打給ふへし、手負五
百人、合千人の人数を御捨被成長篠を攻落し、それをしほに御馬
を被入候へと申、長閑又申、味方一騎討るれ八敵千騎のつよりと申候
千人の人数を失ひ給はん事如何と申せ八、勝頼、長閑か旨に御同
心なり、美濃守又申、然ら八陳城を取、勝頼公を移し申、御一
類中を御陳に備て、山縣三郎兵衛と内藤修理と我等と三人川
を越て時々おり合、長篠に長陳を張候八、味方八信濃甲州へ
の通路八自由なり、上方勢八運送不自由也、終には信長引
候へしと申せ八、長閑又申八、信長・家康程の大將かた(がただ)引申候半(はん)
哉、押懸軍をする時八如何と申、馬場か云、そこにては合戦
を被成候八て不叶と云、長閑又云、あなたに仕懸られて合戦

被成候八んも又此方より進給八んも一つ事にて候、其上懸る競
 とあなたより仕懸らるゝと八人の競も各別成へし、(格別)と申せは
 勝頼、長閑か言葉をふかく信せられ、明日の合戦八御旗八幡太郎義家
公ノ御旗也
 楯なし新羅三郎
義光公鎧也も照覧あれ、(延ばすまじ)のはすましとの誓言也、扱右備八
 馬場美濃守信里・真田源太左衛門信綱・土屋右衛門直村・穴山伊豆守
 貞成梅雪入道・一条右衛門大夫信隆(龍)と五手なり、左八山縣三郎兵衛昌
 景・甘利・小幡・小山田・武田典厩信元と五手也、中八内藤修理昌豊・原隼
 人昌勝・安中左近・望月甚八郎重氏・中根五感白倉是も五手に
 定たり、信長八極楽山川上山
トモ云に陳をめされて佐久間右衛門盛成
 を左に備させ、羽柴藤吉郎秀吉・瀧川監物一益を右にして五万
 余騎の軍勢を十三段に備て柵を前に当て堅めらる、家康公
 は先陳にて高山行原
トモ云に御備を立らる竹廣の奥
八劔トモ云一の御先八大久保

七郎右衛門忠世・同弟治衛門忠佐・松平周防守直乘此時八末
左近ト云三人を一手に
被仰付、西郡松平主殿助忠利・松平和泉守二人を一手に、菅沼小大膳・
松平玄番・土居豊後廣孝本多豊後也、土居三
住スル故に云三人一手、鳥居右衛門元忠・牛
窪衆合て一手、大須賀五郎左衛門康高・本多作左衛門重次二人一手、御前
備八植村出羽・内藤四郎左衛門正成也、信長公・家康公打よらせ給ひ、明日
の軍御評定の処へ酒井左衛門忠次罷出申八、今夜勝頼か備たる陳
の後鳶巢へ押懸一戦をとけ敵を追払陳屋を焼立候八、明日の
御合戦必定御勝成へしと申けれ八、信長公大に御怒有て、今日本
に信長・家康出合軍評定の処へ匹夫の身として推参也、とて散々
にしかるゝ、扱小用あるふりにて立給ひ物陰へ酒井を招きて日本
一の計也、今此辺の者共一万石の米を六斗八武田へ運ぶ折なれ
は態と悪口をはしつれ、早打立給へとて金森五郎八・佐藤六左衛門

青山新七・加藤市左衛門を差添被遣ければ、本多豊後康孝・松平左近直乗も鴟巢へ向ふ、五月の闇に大河を渡、暁方に馳着おめきさけんで責戦、奥平美作守貞能は我か子の九八郎か運を開む嬉しさに一際勇てすゝむ、城中是を見て門の扉を押ひらき一度に切て出もみ合せ戦けれ八、武田か勢こらへ兼て散々に成行中に、元八今川の家臣小原肥前守、武田か家に有けるか一足も不退討死也、是を初として武田兵庫頭信実（信玄ノ弟也）を先として鴟巢に有ける者一人も不残討れけり、味方に八松平主殿助伊忠討死なり、五月廿一日、四郎勝頼家臣の諫を用す、長篠の城の押に八高坂源五郎（高坂弾正力総領也二男ヲ源五郎ト云）小山田備中昌辰（室賀）・諸我入道・相木市兵衛・小泉五人に千の人数を添、残置壹万六千を随かへて瀧沢川を越て備たり、家康公是を御覧被成、敵を方便に乗ておひき出す事勝

頼か軍のつたなき故也、其上昨日鴟巢の右の山へ人数を揚て立
くらへ見せ候事、かたく以て勝頼の軍法逆也、今敗軍有へし
と待懸させ給ふ処に、武田の先勢馬場美濃守七百余騎を二手に
分太鼓を打て信長の左佐久間右衛門尉か三千余騎にて柵より
外の小塚の上に備たる処へ突懸れ八、佐久間か人数こらへすし
て柵の中へ引八、はしめ佐久間か備たる小塚の上へ美濃守山道
の旗を立て働たる一の手を跡へ廻し

二の手に新手を入かへ備たり、武田か中軍のうち内藤修理・原隼人・安中・松本・中根五感白倉、武田道遥軒を大将として甲のしころをかたふけしつまり却て信長の中軍瀧川伊予守か柵より外に備たるに討ちて懸る、瀧川柵の中へ追入らるゝ、木下藤吉郎秀吉・丹羽五郎左衛門長秀五百余騎にて内藤に突懸れ八、山縣三郎兵衛三千余騎にて横鎧にすゝめて木下・丹羽を突くつし正樂寺前竹広の家康公の先陣に打てかゝる、味方への先手大久保治右衛門忠佐、兄の七郎右衛門忠世に申けるは、信長の御勢八兵也当手は主戦なれ八此方より合戦をはしむへし、と鎧を揃(とつて)て待懸たるに、小笠原掃部・小山田兵衛尉・跡部大炊助・甘利三郎四郎・小幡兄弟、武田典厩を大将として後陣に押勢、先手として山縣三郎兵衛、兵を進めて懸来る、甲兵の中に廣瀬郷左衛門・三科

傳左衛門・小菅五郎兵衛と名乗て真先に進め八、味方には真先
大久保兄弟・渡部半十郎則綱互に言葉を懸て鎧を合、柵の
中へさつと追込追出九度のせり合に小菅・三科も手負て
引退く、山縣今八かな八しと采^(配)拜を取て人数を引揚ん
とする処を、鞍の前輪のはつれより打ぬかれて討ち死也、武田か
二手真田兄弟・土屋右衛門尉か兵、敵強とも一足も引^(ひか)しと思ひ
入たる有様に打てかゝれ八、味方是を見て今懸来敵は
今日を最期と思切て死狂ひせんと見ゆる間、谷深所又は
溝を前に当て鉄炮をふせ、五間十間まで引付打へしと
下知する処に、案のことく柵の際へ寄柵を引破らんとひし
めくを鉄炮をつるへ放しに打けれ八、勝頼の宗徒の勇士枕を
ならへ討死す、真田をは渡部半十郎討取、望月を八鳥居彦右

衛門か手にて永田穂父助組て落て首を取也、甲兵色めき立を見て石川伯耆守・本多平八郎・鳥居彦右衛門・平岩七之助鎧おつ取く鬨の声を揚懸れくと下知すれば、御旗本からも池水之助・井沢何助・服部半蔵・水野太郎佐(作力)・渡部弥之助・同平六我おとらしと懸入れ八、武田か兵切立られて旗本さして逃て行、爰におゐて小幡備中・同十六兵衛・内藤修理・原隼人・安中左近・川窪備後・杉原日向守・甘利藤蔵・奥津十郎・岡部次郎右衛門恵光寺踏止て討死す、馬場美濃守は八十騎計にて初め戦ひし場をさらて居処へ一条右衛門大夫懸寄らるゝ、和田といひし同心、美濃守に向ひ御下知あれと申、美濃守につこと笑ひ引退より外の事なしと云處に、勝頼の大文字の小旗敵に追れ押付を見する程こそあれ、武田の総軍

大崩なり、勝頼に付たる八初鹿傳右衛門と土屋宗蔵二人也
宗蔵八兄の右衛門尉の討死もしらす、行衛を無覚束思ひ
両度跡へ乗さかる、勝頼公、宗蔵をあわれに思ひ給ふによ
り両度なから馬を留められて、後には宗蔵を先に立て
退給ふ、其次に典厩、馬乗三騎歩行者三十計にて追付給ふ
か、母衣をさゝせ給八す候故、勝頼の給ふ八典厩にさゝせたる母
衣八紺地に金泥にて武田四郎勝頼と書付たる我母衣也
是を落して退ましと初鹿傳右衛門を以て聞せらるれば
母衣串をは捨て(幌力)縋をは青木尾張と申者に首にかけさせ
来る、昔より今に至まで大将のおくれ口八馬進まぬものなれ八
勝頼の馬草臥て一足も進まず、然處に笠井備前守何国よ
りか見たりけん、馬をはやめ来りて馬よりおり、我馬に勝頼

を乗申、其身は勝頼の馬の手縄を取て戴き乗て跡へ引返し討死す、勝頼の甲には諏訪法性上下大明神と前立に書たる甲なり、炎天ゆへ初鹿傳右衛門に被持おくれ軍の事なれ八傳右衛門是を捨る、武田勝頼敗軍の由聞へけれ八、長篠の城の押に有し侍大将諸我入道(室賀)、勝頼に行向て城を巻ほくし候半やと尋けれ八、早々巻ほくし退候へとの言葉を聞、城を巻ほくす、奥平九八郎喰付出て是をしたふ、高坂源五郎殿(しんがり)を仕る踏留て防処に三ヶ所手負て終には討死なり、小山田退時に清手縄手にて傳右衛門か捨たる諏訪法性の甲を小山田弥介か見付ひろひて歸る、岩瀬の渉を越時に松平主殿介追懸る、小山田備中取て返し一人も不残討死する也、此敗軍已後東三河勝頼に属したる城々皆あけわたし申候

一 此合戦前、御譜代の御中間大賀弥次郎異本二
弥四郎と云者に奥郡の代官を被仰付候か、富貴なるまゝに侈(おこり)の心出来、剩逆心(あまつさえ)を企て爰かしこより悪党を集め足助の城を忍ひ取、勝頼に内通仕、小谷甚左衛門・山田八蔵を引入て勝頼を岡崎へ入、家康公を空おそろしくも弑(しい)奉んと計申候、天罰(逃るゝ)のかるゝに所なく此儀を穴山伊豆梅雪より三州へ告られ候處に、山田八蔵冥加の尽む事を思ひ心を変して岡崎三郎信康公へ訴申に付、大賀弥次郎を竹のこきりにて引ころさせられ妻子八人張付に懸る、此時勝頼八ふせちまて出られけれども計略あらハれ策違けれハ、其より二連木へ働給へハ家康公は吉田へ御馬を向給ふ、岡崎三郎殿八山中法蔵寺に御馬を立給ひ、はちかみ原にて烈き攻合あり、勝頼人数を引取長篠へ押寄しなり此時大津土左衛門・戸田左衛門等鎧ヲ合スルナリ

(天正三年)

一 同年六月、家康公御馬を出され芦田下野守幸成が籠りたる
二 俣の城を責られ、敵兵朝比奈弥兵衛先に進ミて松平彦九郎
を討、内藤弥次右衛門強弓を以て弥兵衛を討倒す、弥兵衛か弟
弥蔵、兄が死骸を肩に懸て城中へ入んとする処を弥次右衛門
二の矢を以て弥蔵をも射倒す、翌朝芦田方より此矢を石川
日向守方へ送りて此矢八誰人の矢にて御座候哉、古の為朝能登
守の弓勢と存候由申越候、家康公、内藤に感状を下さるゝ、二俣
の城能持候により先指置れ、三州侍を召よせられ一日能
をあそはし、次の日す(諏訪原)わ原へ御取詰、海野遠山を破責事七月
より八月迄也、鳥居彦右衛門諏訪原の城をうかゝ八んとて乗寄
けるを城兵鳥居か狸々皮の羽織を見知て是を射る、彦右衛門か
腰着の軍配團に二つ脇指に一つ矢当る、其後腿に当りて馬

より落る処へ杉浦藤八郎寄て引懸て退く故に彦右衛門命
たすかる、それより彦右衛門八ちゃんばなり、此城責のうち、或時松平
左近直乗、菊川の方より責寄る、城中の兵門を開き出て戦しか
左近追立られて崩逃る、其時星野と云者一人小返しをして
踏留る、それを討せしと大勢もり返して敵を城中へ追入る
城より又突て出味方追出さるゝ、家康公は山中より菊川へ
下る南の山に御旗を立られ御座被成候故、小返しの様子をよ
く御覽被成、星野を御前へ召れ、前々の軍功(マ)まで被仰出御褒
美を被下、星野打笑ひ、私か今日の事人跡(マ)に逃申一人おそろ
しく足の踏所も不覚候故右穴の中へ落申候、追敵とも是を
不存して穴の上を踏越て通り申候、漸々はい上り見候へハ、敵は
味方を追散しもはや十四、五間、二十間山の上へ引上る、味方は谷へ

下り遠し、今八遁れぬ所よと存敵に向被申候へ八、味方もり返し城際へ追返し申候、是に何の御褒美を給と申事の御座候八ん是を拝領仕傍輩共よるこはせ候半、とて御前に候酒樽を三尺手拭にてからけ肩^(か)けて罷歸候、扨八月、諏訪原の城明渡返申候

御年譜ニ八芦田下野ヲ依田右衛門佐信蕃ト有、朝比奈弥兵衛ヲ又太郎降参ト有、御年譜ニ八諏訪原ノ城八室賀小泉把テ不降ト在、御年譜ニ八室賀小泉夜密ニ城ヲ明退キ小山ノ城へ籠ル、家康公、松平周防守守忠次ニ諏訪原ノ城ヲ守セラル、後松井ヲ松平ニ御改下サル

二 侯の芦田下野守八病死す、其子右衛門幸政又能城を守申なり

一 家康公、小山の城を御責可との時、酒井左衛門尉申上る八、信玄の弓矢の跡なれは勝頼後詰有へし、城を御責不被成候とも甲州方の城々は次第に降参可仕候間、御馬を入られて然由申上る、松平左近申上るは、小山の城御責可然存候、勝頼、長篠にてよき侍多うたせ、大に敗軍仕候へ八五・三年の内なか

後詰なと成申間鋪候と申上るに付、小山を攻らるゝ処に勝
頼二万余の人数をつれ、伊郎まで後詰に出るに付、城を巻
ほくし釜塚原を直に引退むと被仰処に、酒井左衛門尉申上る八
伊郎にかゝり引退給ふへし、勝頼長篠にて能者を多く討せ
取集勢なれ八中々懸て一戦八成間敷という、家康公も尤と
被仰て伊郎へかゝり退給へとも軍八なし、其時城より出て喰
留る酒井左衛門尉・戸田左衛門一西・大津土左衛門時隆殿^(しんがり)を仕退く、其後
高名の城へ御馬を向られ、追手二五堂口へ八榊原小平太・本多平
八郎を向せ御旗本八横川へ御移り、鏡山へ押上搦手より城へ
責入に依て、城代朝比奈又太郎降参仕、扨二俣の芦田下野守依
田右衛門八大久保七郎右衛門忠世を頼降参仕城を明退駿河田中へ
入る、二俣の城をは大久保七郎右衛門に御預け被成候、此縁を以て芦田

下野大久保七郎右衛門か聳に加なり

一 天正三年十月廿七日家康公平岩七之助親吉に仰て水野下野守信元を殺させ給ふ、子細は元信信長に背き狩屋より岡崎に来るを信長より家康へ元信を殺て給候へとの儀に依て也、家康公は其時分八未御小身にて万事信長の意に御任候ゆへか

一 天正四年の春家康公御馬を被出就の天野宮内左衛門景實を御責被成天野突て出防き戦に味方先手打負大浜平左衛門・大原大助討死仕鶉殿善六も追立られ引退く、大久保七郎右衛門・同治右衛門・水野宗兵衛突懸り敵を城内へ追入る、石川・鳥居・平岩・榊原・本多豊後・松平左近も粉骨を尽す、其後大久保獄山に上り城中を見下し大筒を放す、天野是を防急て降参して城を明渡す

一 同年勝頼高天神に

小笠原与八郎
武田方ニテ籠ル

兵糧を入んため遠州城東郡へ出張

す、家康公より高天神の押として横須賀に大須賀五郎左衛門と筧助大夫とを被給置武田武力衰へ家康公を恐れ奉りて塩かひ坂を出る事叶八て浜辺を押通る、家康公は八子にて横須賀近辺山々に備を立給ふ、儲小笠原与八郎と山縣か軍代小菅五郎兵衛二軍を以て横須賀へ働筧助大夫鉄炮数百挺を以て打立さするゆへ小菅小笠原不叶して退く、此時家康公御合戦可被成と有を内藤四郎右衛門申留む、勝頼も合戦とこのまれ参れとも高坂弾正留申故たかひに御合戦なし

一 同五年八月勝頼二万計にて横須賀迄働浜辺に陣とる、家康公御父子横須賀の城四町北なる丸山に御旗を立られ諸勢八浜辺へ押出備たり、其間入江なる故鉄炮せり合計也、信康は鈴木長兵衛と云者一人召連勝頼の旗立たる所より二町程近所

迄乗寄物見を被成、家康公へ御合戦を進めらる家康公被仰候ハ
敵八大軍味方ハ小勢切所をも構へす　んる方便なくして懸合
合戦ハ利有へからすとて御合戦なし、味方原御合戦より軍か
功者に御成候なり

一 同年十二月十日家康公從四位下、同廿九日左近衛権少將に任させ

給ふ

此本二八天正七歳ト有末二記ス

三河記ニ云天正五丑歳信康卿御台所ヨリ酒井左衛門尉ヲ被遣信康御事
ヲ十ヶ条御書付被遣于時信長左衛門二御聞被成三々存候ト御請申上ル其時
信長家康公へ正本ノ通被仰遣候家康公高モ賤モ子ノカハユキ事ハ同前也
十ヶ条ノ目錄ヲ不残ノ存タリト申故信長モ斯被仰也信康卿者左衛門力讒言
ニ依テ腹ヲ切スル也我モ大敵ヲ拘へ信長ニ背テハナラス不及是非ト御意也
于時平岩七之助申上ルハ信長卿御生害被成ハ御後悔モ可有然ラハ某御守ノ
儀ニ候へハ万事某力態ト被仰候テ某力首ヲ信長へ被差上候ハ、信長モ某
力首ノ参上ニテ御心ヤハラキ給へシ兎角某力首早々被遣候へト申上ル仰ニ云汝力
首ヲ遣シ信康力命ヲモラウヘケレトモ左衛門力サ、へノ上ハトカク成マシ汝力心入ハ忝
ケレトモ汝力首遣シテモ不事行時ハ損ノ上ノ損也恥ノ上ノ辱也不便ナレトモ岡崎ヲ出
セト仰在テ大浜へ御越ソレヨリモ堀江へ御越天正五丁丑十五日御生害也御台ト御中

一ノ巻御系圖二八

天正七年八月十五日

御生害下有

不和故也御姫二人御座ス御中ナルニ余リムコキ御仕合也云々

私ニ云御台ヨリ左衛門ヲ御使ニテ仰遣サレ候モ廣忠公ノ御時織田彈正殿へ

左衛門別心ノ義アリ此ヨシミモアルヘキカ浜松へ不申上尾州へ行シ八逆心成ヘシ

一 天正六年三月勝頼遠州馬伏塚へ出張の時家康公御旗本

より大須賀弥吉

五郎左衛門カ甥ナリ

二十一歳軍法を背き一人進出高名

を遂歸る、然といへとも軍法を相背により御意に違ふ本
多平八を頼走入家康公御自身本多か門へ被成御座平八郎
達而大須賀をかこふに付て八本多共に御成敗 被仰て共
後酒井左衛門か子小五郎出て御佗を申すへ共無御願引終に
牧野半右衛門所にて切腹仕る

一 天正七己卯台徳院殿秀忠公浜松にて御誕生也、三日以前に

内藤四郎左衛門か爰に白張物衣束を着たる老人四郎左衛門か
の上 に 立 て

咲花に和泉河内のおさまりてこかねの橋ををわたす米倉と云捨て門を飛越る、四郎左衛門夢心に追懸、是八何国よりの御使と問ければ、老人の云、当町八幡よりと答るを見て夢は覺たり、其日皆人にかたる

家康公、壬寅之御歳也、秀忠公二十六之御年甲辰、家光公御誕生也
家光公三十八之御年辛巳、嚴有院殿家綱公御誕生也

一 同年八月四日、家康公へ信長公より被申進候八、岡崎三郎殿、勝

頼と心を合、家康公へ逆心の企其隠なし、其上三郎殿おこなひ法に背き治国の御器量無之に付、先大浜へ被遣、又堀江へ御移し、同月廿九日、信康の御母を瀨名ノ娘
号築山殿害し給ふ、信康を又二俣の城へ被移、同九月十五日に御切腹被成候へ、とて御介錯には服部半蔵検使には天方山城を被遣、信康被仰候は、父に向て弓を引ん事天道もいかて守らん、なんそ其企あらん、讒人の訴遁るゝに

所なし、死骸を八大樹寺へ送るへし、とて二人の御娘の事を被仰置、御年二十一にて御切腹なり、服部半蔵御首を打得さりけれ八天方山城御首を打申也

御娘一人八後小笠原兵部大輔ニ嫁ス、一人八後本多美濃守忠政ニ嫁ス

一 天正七年九月、家康公御馬を出され、松平甚太郎家忠・牧野右馬

允康成に被仰付、駿河用船(もちぶね)の城三浦兵部・向井伊賀守御年譜二八を責

伊豆守ト有

させらるゝ、城中よく防候といへとも、家康公壱万余にて被責ゆへ戦ひ負、三浦八一色左京にうたれ、向井八尾崎半平に討れて落城す、其より家康公、由井、倉沢迄御焼働被遊、其時勝頼八沼津に居給ふか此由きかれ、早々川中まで馬を進め河の出たるを越て家康公へ向八るへきと被致候へとも、家康公御軍法よく遠めを御越被成候間、伊郎へ御引取ゆへ合戦はなし

一 天正八年正月五日、家康公從四位上に叙し給ふ

一 同年家康公、高天神を責られんため獅子か鼻に付城を被成
人数を籠置せ給ひ、十月より御攻、高天神には武田か宗徒の
者とも籠置ゆへすみやかに落す

一 天正九年巳三月、家康公御馬を出され(ていたく)手痛せめらるゝ
三河記二八
此城賣向

城ヲ取大堀ヲホリ
大柵ヲ付テ攻落ト有

信長よりの御加勢には佐々内蔵助・野村三十郎

来る、城代岡部丹後を初三浦右近・同雅楽之助・松尾若狭守・神尾
但馬・江戸右馬頭・同主税、城を枕として一人も不残討死也、岡部
丹後をは大久保七郎右衛門か手にて本多主水組で討也、主水、岡部か
首を谷へ取落し夜明て取て帰る也、其首を大久保か同心鵜殿
石見に見せてより丹後か首としるゝなり

首三十八

鈴木

越中守
太郎

兩人か手へ取

首十八

本田作左衛門

首十八

水野国松

同六

菅沼八郎右衛門

同七

内藤三左衛門

同七

戸田三郎右衛門

同二十一

本多彦次郎

此首トモヲ信長公ノ兩使ニハ不見せ、我主コソ大事ナレト家康公ヘ計
御目ニ掛ルユヘ、信長、戸田ヲ後ニ御悪ミアリケリ

同十六

石川長門守

同百七十七

大須賀五郎左衛門

同四十

石川伯耆守

同十

松平上野介

同五十二

本多平八郎

同六

林庄左衛門

同六十四

大久保七郎右衛門

同四十一

榊原小兵太

同十九

鳥居彦右衛門

同五

松平玄番允

同五

松平 赅

同五

久野三郎左衛門

同五

牧野官八

同五

岩瀬清介

同七

近藤平右衛門

惣数七百三十也

一 天正八年五月、藤枝迄御働の節、用船に武田侍朝比奈駿河守
政貞罷在候処、彼か手より長谷川左近・須藤左門・石川五郎作・
天野角右衛門・桜井兵庫・朝比奈市兵衛・同小隼人・矢部弥三郎・庵い
原はら傳内等出て遠めをこへて鉄炮を打懸る、石川伯耆守敵
陳陣を見切に続く勢もなし、然ハとうめを引おるさせ可打
取と下知を加ふるに、敵方便に乗て人数を引おるしたるを
見すまして酒井河内守・内藤弥次右衛門・松平和泉守・同周防守・
平岩七之助・鈴木喜三郎打て懸る、武田方敗軍して桜井兵
庫八須田文平に討れ、朝比奈市兵衛八天野小菅右衛門に討れけり
朝比奈駿河守八久野覚之助と云者を以て此軍を見せしめけれ
とも、家康公の武威を恐れて出合不申なり

駿河守八初ヨリ山下ヘヲリズ、跡ニ備山上ニ居タルト見ヘタリ、文言読分カタシ、廿日田中ノ城主依田信番和ヲ乞テ甲州ヘ走、廿一日、持船朝比奈駿河守ヲ請ルナリ

一 天正十年午二月、勝頼退治として織田信長公より嫡子信忠卿に五万人を添て木曾口へ出され、信長公八七万人の着到にて伊奈口へ向ハるゝに付て、同十八日に家康公八三万人にて駿河へ御馬を出され、北条氏政も関東口に出られ武田滅亡の時や来りけむ、一族旧臣悉く勝頼を背くゆへ一戦にも及はず、勝頼八天目山の下田野と云所にて生害也、穴山梅雪と曾根下野八遠州口の押として江尻の城に置れ候へしかとも、信玄死去より穴山八家康公へ、曾根は信長公へ内通有之候故、此度家康公より招せ給へ八早速随ひ申、則穴山梅雪御案内仕、駿河の河内口より甲州文殊堂の麓市川口へ乱入仕給ふ也信長八勝頼を亡し、甲州仕置に八川尻与兵衛を残し、駿河国

をは家康公へ加増としてまいらせられ、四月上旬に上洛有家康公より御馳走として駿河・遠江・三州御持三ヶ国の道橋を作らせ、兵糧八不申及馬の飼料まで補行あそはし天龍川には小栗仁右衛門・浅井助六・大橋某に被仰付舟橋を懸させらるゝ

四月十一日、大宮ニテ家康公へ一文字ノ刀、吉光ノ脇差ヲ信長公ヨリ被進、十六日
浜松ニテ御馳走ノ時、酒井忠次ニ金貳百両、貞光ノ太刀ヲ信長ヨリ給

一 同五月、家康公、信長公を請させ給ふ為御礼、穴山梅雪を御同道にて十五日安土へ着御なり、信長公より大宝坊を御旅館にしつら八れ、明智日向守光秀を御馳走に被付十九日には惣見寺にて幸若八郎九郎に舞をまはせ、又丹波の若太夫に能をさせて家康公を御慰め也、同廿日に八高雲寺の御殿へ家康公を御招請なり、御相伴には穴山梅雪

酒井左衛門尉・石川伯耆守也、信長公自身御給仕にて珍膳を進められ、其後家康公の御手を引天守へあからせらるゝ安土の天守は二重石垣にして七重に組上る也、高さ十二間、豎八南北にて二十間、横八東西へ十七間也、天正四年の春より力士ほしのごとくに馳て石を揚、巧匠霧間の大廈(か)しゆんう高堂の碧虚にし(切利)のけるもの八夜摩(り)の壮麗を極め直欄横檻のすひかひにそひへ、風景嘉陵三百里の山水も及かたし、信長公色をかへ品をかへてさま(か)の御馳走被遊候同廿一日、家康公御上洛被遊、それより大坂へ御越被成候、穴山梅雪も御同道なり

一 同年六月二日、明智日向守光秀逆心を企て、京本能寺に信長公被成御座候処へ押懸生害させ申、家康公八和泉の

堺に被成御座候而此由被聞召、すくに都へ御のほり明智と有
無の一戦と被仰候處に、酒井・石川申上候八、小人数にて御合戦
如何と存候間、重て人数を催し御退治被遊候へと達而申上る
さら八宇治醍醐をへて歸らんには同前にて日向守と戦八
さらんも口惜、其上瀬田の橋も焼たるへけれ八、とて伊勢の山越
を打て御通り被成に、一揆とも悉おこり道をさへきらんと致
候へとも、伊賀・甲賀の者とも忠を尽し御供仕る、其上剛兵に八
疵付事なく六月三日伊勢国四日市に着御、それより御船に
召れ尾州智多郡と（常滑）こなへに着津被成、無事故浜松へ御帰城也
穴山梅雪八家康公の御供仕候八て信濃路へ御廻りにて候とて
御供なきゆへ山城宇治田原にて一揆にころされ給ふなり

一家康公、三州大浜に一日御逗留に付、本多庄左衛門初名百助を殺むと

する川尻、前かと原隼人衆の内古屋平三郎を小性にかゝへ置たるを頼てたすけくれ候へと申候へ共、地下人こらへす終に川尻を殺すなり

一 信長公生害を聞、瀧川左近・森庄藏

森三左衛門可成
嫡子後武藏守

毛利河内守

秀包も皆逃のほりたる故、甲州・駿河・信濃・上野明国と成故北条氏政も上杉景勝も此国々を望て打出る、家康公御人数は尾州へ長谷川与次・矢部善七に頼れ鳴海・清州まで出されつるか、信長より給候駿河へ未しかくとも打入も致候八ぬと御断被成、早々駿河へ御馬を出さるゝなり、田中の城に高力与左衛門、江尻に本多作左衛門、長窪に牧野右馬允、沼津に松平周防守を被差置、扨北条氏直五万五千にて信州河中嶋へ働るゝ、景勝も信濃を望人数を出され筑摩川を隔一戦を以て備たる

を氣遣、相州へ引返さるゝか、甲州を取へしとて押来るよし
聞召、酒井左衛門尉・松平殿頭・大須賀五郎左衛門・大久保七郎右衛門・石川
左衛門大夫、穴山衆に八有角大学・穂坂常陸を先として被指越
此衆信州善光寺にて盆祭をいたし、信州諏訪の城請取
に行に、信州梶か原にて北条衆に打合、其時酒井左衛門尉と
大久保七郎右衛門と殿を争ひいつれとも定かたし、岡部次郎右衛門
乞請て六百の人数にて大軍の北条衆を上道十二里のうち八里
の間にて三十二度まで退るなり

七月九日、甲州へ着御、十八日ニ諏訪へ人数ヲ被置候所ニ、諏訪安芸守頼忠約ヲ
変して御敵ト成り、松平又七郎家信力陣ヲ襲、同廿六日、味方伏兵ヲ以テ敵十余
人ヲ殺ス、同日信濃ニ郡ヲ依田右衛門佐信番ニ被下之

一 北条氏政、それより旗本をは甲州乙事(音骨又は乙乙)に陣し、黒駒には
北条左衛門佐、笹子峠に八北条安房守陳を取て駒飼迄足輕を

懸る、恵林寺筋縦坂へは黒沢上野介陳取、天目山には風間(陣)孫右衛門陣取なり

一 甲州士の内武田衆八人質を召連家康公の御迎に出、甲州柏坂の隆勝山といふ処に取出を築、御陳城(陣)に構御馬を奉待故、七月十九日、浜松を御立廿四日甲州へ御着、右の勝山に御旗を立られ、則此所に服部半蔵を指置れ、左府一条右衛門大夫被成御座候所、武田被官の侍御礼申上候は

今井九兵衛 遠山右馬助 横田甚五郎 五味主殿介

城伊庵 同織部 工藤随齋 同市兵衛

西山十右衛門 市川伊勢齋次郎 武藤三河入道松月齋

川窪新十郎 今福求馬 駒井右京 小見山又七郎

右大久保新十郎を以て御礼申上る

一 若御子口へ榊原小平太・大須賀五郎左衛門

五百騎大將城小笠原
一五二被下一ノ大身也

土居豊後

三頭被遣候、是八古府中へ敵をよすまじきため也、恵林寺筋

大野に取出の城を築て松平玄番・内藤弥次右衛門・曾根下野

を指向らる

甲州落去ノ時信長公下野力高國寺の城ニ在シヲ呼出シ兼テ内通
有之トテ則城ニ川東ヲ添テ取セラル、家康公甲駿信御手ニ入テ

後曾根力川東ヲ御取返シ被成候義八
譜代ノ主ニ逆心八本意ニ非ストノ仰也

八代の小山へ鳥居彦右衛門百三十騎

雑兵六百にてつか八さる、後に三宅宗左衛門・菅沼藤蔵を被遣候
は甲州と北条八親類なり、家康は他人ゆへ甲州侍自然に
うらかへり検使を可打取との御心つかひなり

一 天正十年七月廿九日より家康公と北条氏直と対陣なり

此日曲渚庄左衛門新府より若御子へ二里若御子より長沢へ二里
半合て四里半の間を見切、家康公御家人甲州不案内ゆへ
曲渚か見積にて備を立さするに備立様能故氏直五万五千

の旗本と北条左衛門・同安房守・黒沢上野・風間孫右衛門と四手指向たるを一つに寄さする八曲渚か武功なるへし

一 八月九日北条方より松平玄番・内藤弥次右衛門か大野の陣へ五百程にて夜討し張番の者三十余人討取、残者共を取出へ追込歸る処を甲州侍共勝沼の町にて追付敵廿四人討取内風間孫右衛門か聳三沢甚四郎と云者は采拝を持たる者なるを御手洗五郎兵衛討取なり

一 八月十二日北条左衛門佐兵を卒して古府中へ寄る、鳥居彦右衛門元忠・水野藤十郎康成・松平備後守清宗・三宅宗左衛門康貞戦打勝、又の日味方千百余にて黒駒にて左衛門と戦て首数貳千六百七十三打取、辻甚内・高橋次右衛門・中根七右衛門・土屋次郎右衛門・水野藤十郎能敵を討て高名仕、北条左衛門八馬草

臥たる故鎌嶋か馬をかりて漸々谷村迄引取也

一 駿河沼津にて八松平周防守木瀬川を越北条衆とセリ合有
与力のうち岡部・都筑其外少々集り勢三嶋表へ刈田に行
けるに北条衆の八重かまりに乗懸り岡田藤八・都築助太夫を
初数多三嶋千貫樋にてうち死す、星野と云侍甥と子と
三人踏留りせり合の場中の高名仕、相支により味方も少々
もりかえす、敵八勝に乗て次第に人数かさむゆへ始終こらへ
かたき所なれは馬引寄打乗候に甥や子の馬の乗様を
見てか様のおくれ軍には馬の頭を敵の方へ向て乗もの
なれとて敵は間近く進来るに是を見習へとて馬より
飛おり乗なをして見する間に若者共を先へ立引退く

甥子トモヲ先へ退ト云トモ
ノカサルユヘニ如斬スル

諸人は是をほむれ八我は逃る事の上手にて先年

菊川にても古穴へ落入たるとて笑ふ

一 駿河の海賊衆伊豆豆城を破て敵を討取、ことに向井兵庫
采拝持たる敵を討取

一 九月初信州伊奈侍大将保科弾正誓紙を以家康公御被
官に成、同所小笠原掃部太夫

二月十四日信州松尾之城主小笠原
掃部助、信長へ忠節可仕由以使申ト云

同所

晴近衆・服部衆又千久与左衛門御味方に罷成、松岡刑部は
井伊兵部を以て申上る故則兵部か被官与力に被仰付也

一 芦田小屋八北条方なれ八味方より曾根下野百二十騎・岡部
次郎右衛門三十騎・植松弥蔵・劔持弥七合三十三騎と今福求馬
三井十右衛門・川窪新十郎其外三十一人八武田勝頼の小性也
其故終に軍にあ八す候間幸今度芦田小屋へ参敵に合見
習以来八御小性組にて召仕とて被遣候、則芦田小屋へ参候と

せり合有、横田甚五郎、敵を馬にて乗倒し妹賀日向傳次に高名さする、今福求馬・三井十右衛門勝たる働有、十月廿一日望月を破る、城主源五郎落行、此刻横田甚五郎・金井原与十郎と云誉の者を討取也、廿六日、芦田小屋の敵を悉く切たやす、北条方所々にて打負に付て、氏直、家康公へ無事を御入、駿河・甲斐・信濃を家康公へ御渡し、氏直は上野支配の御約束にて候、其上氏直、家康公の御賀に被成候に定て、天正午年十一月退却也

十月、家康公、依田右衛門佐信番・真田安房守昌幸ヲ以テウスイ峠ニ備サセ北条ノ糧道ヲ塞ル、故、氏直和ヲ乞、上州浪田ヲ氏直申請、甲州都留郡・信濃佐久郡ヲ家康公へ被進約束也

一 此扱済し後、北条より甲州平沢の朝日山に取出を築るゝ
北条衆八平沢よりあなたへはや入たる処へ家康公より朝比奈弥

太郎

後改宗左衛門、長篠合戦ニ
内藤修理ヲ討タル武士ナリ

を御使に被遣候に、北条衆の中へ馬

を乗入、北条美濃守か備を聞届、御状を渡断候条は、武田
勝頼代々東上野の内北条領を伐取らるゝ城々、一に谷城
二に厩橋、三に山中、四に応古、五に浪田、六に尻高、七に名来美
八に中こ城、九に小河、十に猿か江、十一に新条、十二に岩櫃也、西上
野八不及申、我等支配可申処、北条美濃守達而申上るに付相
渡し候、其子細八、先年駿河今川義元代盛の時、美濃守も
我等も駿河に人質にており、互に幼少の朋友なるゆへ如此
然処に此方を可押ためか取出を築るゝ八表裏有事
疑なし、是非一戦可仕と被仰遣、はや大須賀五郎左衛門・榊原
小平太・土居豊後を若御子の上へ押上させ、左の手へ八酒井
左衛門尉・松平主殿・石川伯耆守・酒井与四郎・本多平八を佐久小縣

へ差向て物見を被懸、若御子より長沢の宿を取て合戦を備
家康公八新に急度備させらるゝ、北条八八か嶋の木立へ大軍
にて乱入たる故、合戦すへき様なきまゝ大道寺か子直政を人
質として美濃守召連、朝比奈弥太郎同道にて弥無事無相
違由を申、家康より酒井左衛門か子小五郎を北条へ被遣候、其取
次八榊原小平太なり、此故に北条家への使者は榊原仕、こまか成
使八弥太郎仕る、北条家の人質八鳥居彦右衛門預申候

北条美濃守氏親八小田原籠城合戦ノ時、葦山ニ籠ル、家康公ヨリノ仰ニ随ヒ城ヲ
出テ小田原ニ入アツカヒヲ致被申、其故北条家滅亡ナレトモ此人ノ子孫は今ニ御家ニアリ
北条宗雲 氏綱 氏康 氏親 久太郎 伊勢守氏宗

一 天正十年^午十一月より^未八月まで十ヶ月の間上州につゝきたる信
州佐久郡にて七の敵城を責取、内前山城主をは石黒八兵衛
討取申候、一宮修理・松沢五助鑑合、雨宮十兵衛・市川内膳・土屋三郎左衛門

鑑下の高名、山中主水・小幡藤五郎も高名仕候なり

一 家康公、駿甲信を御切随、遠州・三州合五ヶ国の主にならせ給ひ武田の侍をも御召抱、又勝頼の御為とて田野に寺を御立被成小見山内膳か弟坊主を住寺になされ、信玄の菩提所恵林寺へも前々のことく寺領を御付被遊、大慈大悲の御名将なり

一 真田安房守昌幸と云者、本八信州侍にて父八真田弾正一徳齋とて信玄の時の降参侍也、勝頼滅亡の後に北条氏直に属したるか、天正十年九月廿九日、家康公と氏直と御和睦とゞのひ、甲州都留郡・信州佐久郡を氏直より家康公へ御渡被成、右両国に氏直御構なく、又家康公より上州を氏直へ御渡し御かまひなきに定たる時、真田一身の手柄を以て上州の内沼田・尻高・名来美・中条・小河・猿か江・新条・岩櫃八ツの城を責取て元三

万石の地に添て六万石の主に成也、是天正十年極月より同十一年末の九月迄の働なり

天正十一年二月廿二日、依田右衛門信番・同弟源八郎、岩尾城主岩尾次郎ヲ賣ルトテ兄弟トモニ討死ス、岩尾モ廿三日ニ城ヲ出テ退ク、同三月、大久保七郎右衛門忠世ヲ信州ニ被遣、依田力討死シテ子康國幼少成故也、同廿八日、諏訪頼忠随ヒ奉ルユヘ諏訪ヲ被下也

一 天正十一年七月、家康公の御娘北条氏直の室に入給也、同霜月、真田安房守、本多平八郎か方へ矢文を射て、以来八家康公御幕下にと望なり、其後北条家の糧道をさへきる也、其時遠州浜松へ使者を進上申、嫡子源三郎後号伊豆守を遣す、此故に源三郎、本多平八郎か聲に成なり、初天正十二申年八月廿四日に、真田に信州上田の城を給る家康公と秀吉と小牧陣、北条の氏政より真田か責取申城の内せめて沼田計も北条へ返し給り候へ、さ候八、秀吉との弓矢に加勢仕へしと被申に付、家康公より沼田を北条へ渡し候へと真田に被仰付候、然八代地を被下候へと望たるに、それ八成間敷由被仰に付

此沼田八家康公よりも氏直より請不申候、我等か武勇にて伐取候、とて沼田を北条へ不渡して大坂へ使を以て秀吉に属し申たるなり

一 天正十二申年、家康公へ北畠信雄卿

織田信長ノ次男伊勢北畠国司跡目、元八茶筌御曹司也

より

援兵を御頼候、子細八信雄卿の家臣に津河玄番・岡田長門守・浅井田宮丸といふ者有、此者共に秀吉と懇比(ねんころ)被成信雄卿へ逆心を仕、打殺申候へと頼るゝ所に、三人の者共承引仕候を信雄卿聞召て、三月三日に長嶋の城にて三人を殺し給ふ其中に岡田長門守か弟少五郎八ひとつつ朋友をかたらし、星崎の城を堅めて信雄卿に恨を報んとす、信雄卿より水野宗兵衛尉忠重を大将として三月六日に星崎の城を責られ、外廓を攻破るといへとも、本城八

堅固に持かたむる、然といへとも始終こらへへき様もな
く、秀吉公の後詰の沙汰もなければ力なく十七日に城
を開き勢州へ退く、それによりて星崎の城へ水野宗兵衛
を被入置、扨秀吉公八右の三人に念比(ねんころ)の事也、信雄卿をは兼
て亡し度思召により、定て追付人数(おつつけ)を可被出間、信長公
への懇比を思召被出御見次(みつき)被下候様にとの事也、家康公
聞召、秀吉、今天下を取事其身の果報と云なから畢
竟する所八信長の厚恩也、然は信雄八正しき主君なる
に、天下を渡し申までこそなくとも、弓を引るゝ事本
意にあらず、家康は義を重し候間、秀吉尾州へ発向
におゐて八必ずくひまいらせん、御心安思召候へとの御返事也
一 犬山の城には信雄卿より中川勘右衛門をすへ置るゝ処に

尾州峯^(嶺)の城へ中川番手に行留守なれ八、殊更時節よしとて秀吉の味方として池田勝入^{池田庄三郎信輝力コト也}三月十三日、犬山へ押寄城兵を討取犬山へ入、中川勘左衛門是を聞帰らんとするを池尻平右衛門中川を殺す、池尻も其にて殺さるゝ、同十四日の夜、家康公・信雄卿八清州の城にて軍法の御談合被成、明日小牧山へ打出て出城をこしらへ、秀吉馳向ならば戦陣可被成との事にて、午刻清州を出て小牧へお八しまさんとするに、其朝卯刻、勝入小牧近辺へ来て在々を焼に、方々へ人を遣し同時に焼立手早に仕廻けり、家康公、勝入か焼働するを聞召、勝入をあますなとて御馬をはやめ給へとも、勝入はや引退て見へす、扨小牧へ被成御座、十六日の朝より御人数を犬山へ指向らるゝ

処に羽黒の八幡村に森武蔵守長一・尾藤甚右衛門陳(陣)を取
鉄炮を打懸る、味方奥平九八郎信昌・酒井左衛門尉忠次・松
平紀伊守家信、鉄炮を放せ(いまだ)未鑑を合せさる所に、武蔵守
か備より使番とおほしき武者一騎乗出したるを
味方より鉄炮にて打殺す、是にて敵色めくを見て
奥平九八郎千騎にて川を越武蔵守か三千と相戦、武
蔵守しはし戦けれとも不叶して羽黒のうちへ引入を
追懸く犬山近辺迄追付る、野呂助左衛門子息助三かへ
し合せて討死す、武蔵守か大勢、奥平に懸立られ
犬山へ崩懸よし聞ければ、池田勝入信輝子息紀伊守
之助(元助)・同弟古新後号羽柴
三左衛門輝政・稲葉伊予守通朝・子息右京亮
貞通張出たる備を段上に引上たり、家康公敵人数を

段上に引上たる由聞召て天野作左衛門を被遣、上手の進を止られ勝鬨を御揚、小牧へ御歸被成候

一家康公・信雄卿八小牧に御陳(陣)を被召蟹清水・外山村・宇田津村を要害にとらせ給ひ御人数を入置るゝ、又三州よりの往来自由のために春日部の郡小幡の古城をも御取立、本多豊後守廣孝に穴山衆穂坂常陸を被籠置

一 秀吉公、津川・岡田・浅井に懇切を被成も信雄卿を亡し給八ん為なり、彼三臣か生害に鬱憤を事よせ三月廿一日大坂を打立給へ八、宇治・瀬田辺に扣し勢も次第に打出都合十二万五千余也、廿七日に秀吉犬山の城に入給ひ、小牧山に対し向城を多拵人数を被置、二重堀に八日根備中守弘龍兵八、二千、岩崎山には稻葉伊予守通朝父子兵八二千

小松寺或八
駒辻 丹羽五郎左衛門長秀兵
八千、青塚に森武蔵守長一兵
三千
内窪山に蜂屋出羽守頼隆・金森五郎八兵
三千 其外村々嶺
々(陣)に陳所をかまへ土手をつき堀をほり柵を付て人数を
置くゝなり

一家康公は遠參駿甲信五ヶ国(々々)の人数三万千の内、越後の

景勝押へに信州勢八一円に残御置れ、又北条氏政表裏の人
なる故此押へ八甲府に平岩七之助、郡内に鳥居彦右衛門、長
窪に牧野右馬允、沼津に松平周防守、奥の国守に松平玄番・

三宅惣左衛門

是八御後備四頭之内
高井彦右衛門聲也

田中に高力与左衛門

子息与四郎八
御供ナリ

久野に

久野三郎左衛門

是八大須賀五郎左衛門力御供ノ時、北条家梶原海賊
横須賀へ可上ル御遠慮也、子息左大夫八御小姓並二御供也

信州伊奈に

菅沼大膳・小笠原掃部・千久波邊晴近衆・松岡刑部、諏訪、木曾、

松本の小笠原・真田

是足輕五千十二騎
出シ御供ナリ

佐久間に柴田七九郎、小室、芦田

大久保七郎右衛門 是八信州伊奈・佐久・小懸・諏訪・松本ヲ打廻り、遠州浜松ノ御留主居ナリ 岡崎に本多作左衛門、懸川に石川日向守 子息左衛門大夫八半着到ニテ御供伯耆守相備也 右の分に壹万六千人ついへ残て壹万五千にて向給ふ

一 四月五日、池田勝入犬山へ来りて秀吉公へ申けるは、村瀬作右衛門と申者一揆大将仕、篠木・柏井の者を催し森川権右衛門を要害に入置申候半由申候、其上小牧の人数追日重り見へ候八、遠江・三河の者共馳加り申にて候、左候へ八彼国は守る者も有間敷候、此透(す)に三州へ乱入候八んと申けれ八秀吉公如何にも可然間、明六日に打出東三河を方火し早々引取、篠木・柏井に城を拵人数を籠置へしと被仰付、則大将には三好孫七郎秀次 実八三位法印力子、初八三好山城力養子也、故二三好ヲ名乗 関白秀吉養子 トシテ任関白也 を定められ、秀吉公八即犬山を御出楽田を本陣

となされ勝入八亥刻より打立、六日の巳の刻に篠木
柏井に着、九日に三州へ発向の催しなり

一 篠木より家康公へ池田勝入当所迄来り、来ル九日ひそ
かに三州発向仕候由注進申上候に付小牧に八酒井左衛
門尉相組松平主殿助共に三千、石川伯耆守相備酒井与

四郎

石川伯耆守相備二御旗本二テ一ノ御心易御頼母敷思召、酒井与四郎ヲ元龜
元年九月ヨリ付ラル、事天正十二年霜月秀吉公へ欠落仕時思ヒアタル

内藤弥次右衛門共に千五百、本多平八郎組五百、合三手にて人
数五千を小牧に御残置、御前備岡部弥次郎長盛三百
五十、榊原組穴山衆合て六百、榊原小平太康政か勢九百
大須賀五郎左衛門康高千五百、水野惣兵衛忠重五百・本多彦
次郎康重三百五十六手、合四千二百にて八日の未刻に小
牧を御立被成、御旗をも不被立しのひやかに尾幡の城に

本多豊後守廣孝
ヲ籠置ル、城ナリ 御着陣被成、本多豊後に遠聞の侍十人計
被仰付龍泉寺表へ被遣南をさして勢の行事有り
見届可参旨被仰付、戌刻に出し給ふ処に豊後守
馳返り多勢引もきらす打通り候由申上候により
猪腰原の巽の山に御着陣被成、夜の明るを待セ給ふ
一 池田勝入八八日の亥刻より篠木を立て夜の中に岩崎へ
丹羽勘介か居城を責る、伊木清兵衛・片桐半右衛門平攻に
責て乗入、勘助氏次八小牧に有て其弟次郎介わつか
侍十騎にて籠たりけれハしはし戦といへとも終に土
肥七郎右衛門に討る、池田紀伊守か家人大隈守左平次
城兵のよき者を討取勝利を得、軍初よしとして悦ひ猶
岡崎へすゝまんとす

後号牧野
新九郎

一 同九日三好孫七殿は池田・森・堀三人を先陣として後陣に打れけるか岡崎へとの三心有て跡を気遣もなく進ミ給ふ所へ六手の先衆秀次の先陣へ切懸る、田中久兵衛秀次ノ先手後号筑後守か手を伐崩す、榊原小平太・丹羽勘介兵を進て逃るを追て孫七殿旗本を目懸てかゝる、木下助左衛門同勘解由左衛門・岡本彦三郎懸合る、鎧を合する内に孫七殿の旗本見崩して続く者門なかりけれ八木下・岡本も討死する也、かくて孫七殿の人数南北へ逃散て悉く敗軍なり

一 池田父子・森武蔵守・堀久太郎は谷川を前に当て陣を備られし所に孫七殿敗軍の由にて落武者五騎、三騎つゝ見へ来れは堀久太郎大音を上、今日の合戦八旗

本か先手なり敵来らは五間十間に近付鉄炮を放へしと

下知して待懸る処へ、味方逃る敵を追て責来けるか、堀か
備のかたきを見て人数を備むとする処に、堀久太郎真
先に進て息をもくれす味方を追返す、御人数少々
討るゝ、池田勝入・同紀伊守・同古新・森武蔵守も追つゝきて
追行、本多次郎康重、命を不惜戦ひ七ヶ所疵を
かうむる、堀は猶味方を追て進所に、井伊兵部直政其
比は万千代とて十九歳成けるか、三千の兵を長久手の巽
の山に三段に備、鉄炮を打せしつゝと懸りけれ八、堀か
先勢進事不叶、人数を立んとすれともまはらに乱
したる人数ゆへ早速立られず、森武蔵守手鎧おつ
取^(つぎ)続やものとも、と下知して破らんと進処をねらひ
すまして放たる鉄炮、森か眉間を打破、馬より落るを

本多八蔵走懸て首を取、敵是に力を落し弥すゝ三兼たるに、味方八勝に乗て山の尾崎を取て勢を押廻す、敵の右の手池田勝入父子八大勢を下知して猶井伊万千代か備へ打てかゝらんとする処に、岩崎山の峯つゝきより朝日の出るかごとく金の扇の御馬印を押上たり敵是を見るよりも得川殿こそ是にましゝけるそ、といふ程こそ有けれ、池田か兵見るうちに裏崩して是をもためす逃行、秋田加兵衛・梶浦兵七郎・片桐与三郎・竹村小平太、勝入か軍のあやうきを見、井伊か陳へ懸入討死す、御家人永井傳八直勝後号右近ト
信濃守力父也二十二歳、勝入と刃をましへしはし戦ふに勝入か首を取、安藤彦兵衛貞次後号帯刀
对馬守力父池田紀伊守か首を取、池田丹波守八勝入か敗

軍をもかへりミす、手勢を一所に立て少もさらす一戦に討死を極て備たりけるか、池田父子、森武蔵か討死を聞て備を不崩退く、味方の衆逃るを追て打行を、本多佐渡守、内藤四郎左衛門正成制し留め、御馬を小牧の口へかへらしむ、大久保次右衛門忠佐・渡部忠右衛門重綱に被仰付、今日諸士の軍功を沙汰せらるゝ

一 天正十二年卯月九日、長久手の合戦に池田勝入父子・森武蔵守討死、三好孫七殿敗軍の由秀吉公の陳楽田へ聞へければ、秀吉公聞召、安からぬ事かな、家康勝ほこつてあらむ所へ押寄懸散してくれん、とて金のふくへの馬印押立打立給ふ、先勢より十六番迄の人数悉く馬をはやめうちける、龍泉寺坂を下り給へ八、本多平八郎忠勝手勢六百

の内半は小牧に残し置、わつかの小勢にて秀吉の大勢に少しも恐れず、三浦九兵衛・梶次郎兵衛・牧宗次郎三人を遣して物見をかけ、其後平八郎自身(あいたがうもの)相隨者には松下勘左衛門・匂坂与五右衛門・小野田与次郎を引連物見に出秀吉公の陳の透間有ら八討て取んと大軍に相ならんて行、秀吉公の先手共平八をうたんとす、秀吉公制して云、平八郎八是勇士也、肌たわまつ目ましるかす、勇氣劫生壯胆激烈たり、必々取合へからすとて押行るゝ処に、家康公長久手の一戦に利を得、はや御人数を入給ふよし聞へければ、然八小牧へ懸て一戦せはやと、の給いけるを、稲葉伊予守通朝、日も西山にかゝり敵も勝て甲の緒をしめ候へは、早柏井まで御馬を被

入可然候八んと達而諫し申ゆへ、被任其意御馬入なり

秀吉龍泉寺へ被出シ間ニ樂田へ押詰、秀吉ノ陳屋ヲ焼立八敗軍疑不可有、ト酒井左衛門・本多中務進メ云ケレトモ、其時ヨリ伯耆守八秀吉へ別心ノ義有ニ依テ不成、其故忠勝マテイツル

一 秀吉公の本陣(陣)八樂田、信雄卿・家康公八小牧に御旗を被立

三月より霜月まで御対陣なり、但六月十三日に秀吉公も

歸陣(陣)、家康公も御歸陣被遊後は御留守計也、此時秀吉

公と御合戦有へしとの御内談ならしの御備立八三河・遠

江・駿河・甲斐・信濃五ヶ国の御人数四万五千、此人数配、大久保

七郎右衛門忠世五ヶ国の人質を大小ともに浜松へ集め、是を

守る御定(ごじょう)なり、大事の弓矢に二つの疑なき侍大将の役也

今度有無の一戦に信濃人質八甲州へ遣し、甲州の人質八

駿州へ、駿州の人質八浜松へ、尾州清洲へ参着の時、五ヶ国

の人質を一度に浜松へ集る定なり、五ヶ国の内信濃・甲州

駿河三ヶ国の城々へ八百姓の人質を取込、山家の獵人に弓・鉄炮を持せ廿日相待すへし、是ハ此合戦若おくれにおゐて八二度めの合戦を被成候而御勝利無

疑大正兵の備定なり

是ニ付テ家康公被仰候ハ、武田勝頼長篠ヲクレノ時、五ヶ国ヲハライテ持ノ城々ニ百姓ヲ

籠置、四万余ノ人数ニテ浜松へ働、二ノ合戦ヲ被致ハ我必討死仕トテ、酒井左衛門・内藤四郎左衛門モ兩人ナカラ危存候由申二付、駿河田中へ両度の働ハ敵ヲ不得ト云行也酒井

左衛門、五千の人数を請取十手に備へ一、二の勝負を以て一番合戦の役、軍の露はらひ大将也、左衛門事、東三十三ヶ国一の武功の侍と信長もの給ひし

大須賀五郎左衛門、五千の人数十手に備へ一、二の勝負を持て二番合戦なり

本多平八郎、五千の人数を十手に備へ一、二の勝負を持三番合戦の役也、敵の旗本へ懸て勝負極めの大将也

榊原小平太、五千の人数を十手に備へ是も一、二の勝負を持
四番合戦の役、敵後備を切崩す大将也

家康公御旗本八両陳(陣)共に八千の人数、井伊兵部八極なし
平岩七之助、五千の人数十手に分二段に備、御後強く堅め
少も不働備定なり、不危大将也

石川伯耆守欠落已後相備、酒井与四郎・内藤弥次右衛門兩人
を除て其外は平岩か相備也、就中七之助(マ)に指引の
助言は石川日向守也、少人数を以大敵を押掠(マ)る人数仕
なり、三州一の宮退口の武功ゆへに此備二段目の大将也
息左衛門太夫八父の人数を連て先手のうちなり
井伊兵部大輔、壹万の人数を請取岡崎に残る役也、引
残て二千の人数八持の城々百姓の人質奉行に五十、三十

つゝ可籠置也、又秀吉陳(陣)々作法にて土手をつき
陳(陣)を永引候八、平岩七之助相備ともに指かへ、壱万五
千の人数にて東三河を美濃の遠山へ働出、岐阜
或は岩村へ打出て敵の後の国へ焼可働、為其案内
に美濃侍に遠山勘右衛門明智ノ城主也 遠山三郎兵衛苗木城主 兩人浪人
にて有けるを兵部か手前に拘置候、又申四月池田・森
かことく敵岡崎表へ向て働におゐては、鳴海表対
陳(陣)の左衛門尉を初て後へ懸ら八、いかてか崩さて有へき、其
時兵部・七之助壱万五千を以秀吉の旗本へ懸て切崩役也
一 小牧の留守居石川伯耆守并相備、酒井与四郎・内藤弥次右衛門
千五百にて秀吉の陳(陣)所へ土手の中へ押込陣屋を千軒
焼

一 酒井左衛門尉相備松平主殿三千にて、秀吉の陳所へ押寄切立土手の内へ押込陳屋に火を付焼立る、秀吉公の留守居六万五千防戦に力なく岩崎小松寺さして逃行、尾口・楽田に堅たる者共まで家康公(マ)龍衆来り給ふとて混乱す

一 瀧川左近将監一益八織田信長の一家老にて、甲州武田滅亡の時上州を信長より給り、東国の官領職を預奥筋までも切随候へと被申付候へ共、信長生害に依て上州より逃登り、柴田修理勝家と組して秀吉公を亡んとしてたりけれ共、柴田滅亡したりけれは秀吉公へ(註)侘言仕、北伊勢五郡の領地を秀吉公へ返し、其身八江州南郡にて漸五千石を領して有けるか、此度信雄卿

に楯をつきて秀吉公への忠心にせんと思ひ、尾州蟹江の城主前田与十郎をかたらひ、九鬼右馬丞嘉隆と同船して六月十五日の夜、三千余人にて蟹江へ入、家康公折節清州に御座候而聞召、一騎懸に打出させ給ふ井伊兵部続奉る、大須賀五郎左衛門・榊原小平太かけ付海の方をはやく取堅たりければ、城へ入おくれたる敵の兵半は舟に乗て鉄炮軍す、岡部弥次郎八津嶋より蒐付、瀧川か甥長平衛といふ者を生捕て奉る、家康公御覽被成縄を御ゆるし、誅するに及はすとて城内へ入させ給ふ、有難御懇情なり、是によつて瀧川降参仕、蟹江の城主前田与十郎を切て出し、瀧川八城を出て後越前の五分一にて終りぬ

一 八月、秀吉公、十六騎(ママ)を卒し尾州二の宮山へ取のほり、奈良村より五郎丸久地三井重古近辺に陳をとらるゝ信雄卿は郡村(陣)に對陳をかまへ、家康公は小牧山に被成御座、奈良村の近所水石に城をつかせらるゝ時、秀吉公より無事の御扱様々なる故、家康公浜松へ御歸被成候

一 九月、秀吉公だしぬき清州へ働るゝ故、家康公聞召早速三遠の勢八千にて夜通し御馬を急せ給ひ、大久保次右衛門を物見に出させ給ふに、敵の中へ乗入足輕を乗倒し小者に是をとらせたるを見て敵驚周章たるに、金の扇の御馬印真先に進来るを見て、秀吉公の惣勢四万五千取物も取あへず混乱して敗軍也、秀吉公の旗本も其夜の内に十三里逃る、又三万の人数八大將に離れ逃る

とて道の舟橋を踏切てほうくの躰にて遁る也

十月十六日、清州ニ酒井左衛門尉、小牧ニ榊原小平太尾幡ニ菅沼新八郎ヲ被指置、十七日ニ家康公八岡崎へ歸玉フ也

一 秀吉公富田左近・津田隼人兩人を以信雄卿と和儀を被調

十月廿日、矢田河原にて御戦 済て、犬山の城も本の

ことく信雄卿へ返し被進、秀吉公は大坂へ御歸城なり

一家康公へも御和睦の事八信雄卿を以御申に付、其意に

応られ家康公の御次男の若君 後二三河守 結城中納言 を秀吉公の為

御養子上洛有、御供には石川勝千代 石川伯耆守カ 二男ナリ 本多千千代 (仙)

本多作左衛門子 後号飛驒守 参候、若君則羽柴氏を御名乗羽柴三河守秀

康と申なり

一 十二月廿五日、越中国佐々内蔵助、浜松へ参、家康公へ奉頼は

秀吉、内蔵助を討んと被致、可防方便無御座候間、加勢

を以我を御救被下候様にとの事也、それゆへ彼国へ人を被遣見せらるゝに、信州飛脚(驛方)の嶮難なる道に寒天の比中々秀吉人数を可被出様なきよし申上候ゆへ、御助勢を不被出なり

御先祖記二卷終